

機関番号：32663

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21700627

研究課題名（和文）近世後期における江戸庶民の旅の費用 その費用の調達と必要経費に着目して

研究課題名（英文）The travel expenses of the Edo commoner in the later part of Edo period

研究代表者

谷釜 尋徳（TANIGAMA HIRONORI）

東洋大学・法学部・准教授

研究者番号：40527933

研究成果の概要（和文）：

本研究は、近世後期における江戸庶民の旅を、費用の調達と必要経費の側面から検討したものである。近世後期の江戸庶民にとって、旅は多額の金銭消費をともなう贅沢な娯楽であったが、日頃商工業に従事する江戸庶民は、近郊農村に暮らす庶民（農民）よりも、金銭的にみて豊かな旅をしていたことが確かめられた。また、江戸庶民の大半は旅費の全額を個人負担で賄うことが不可能であったため、彼らは「代参講」に加入して旅費を捻出していた。

研究成果の概要（英文）：

This study examined the travel of the Edo commoner in the later part of Edo period from the side of the expense. For the Edo commoner of this time, the travel was luxurious entertainment with a large amount of money consumption. The Edo commoner who ran commerce and industry routinely did a rich travel economically than the commoner who lived in the suburban farm village. It was impossible that most of the Edo commoner prepared for the total amount of the travel expenses in individuals. Therefore they managed to raise the travel expenses by joining "Daisan Kou".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：近世後期、江戸庶民、旅、旅費、スポーツ史、娯楽

1. 研究開始当初の背景

近世後期は、庶民の旅が全国的に大流行した時代であった。この当時、街

道筋ではすでに貨幣経済が浸透していたため、庶民が旅をするためにはそれ相応の金額の用意が必要であった。その意味で、近世後期における江戸庶

民の旅の歴史を紐解こうとするとき、旅費の問題に関する検討を欠くことはできない。

ところが、従来の旅行史研究において、旅費の問題を江戸庶民に特化して論じる試みはみられなかった。

2. 研究の目的

以上より、本研究は近世後期における江戸庶民の旅費にまつわる実際を明らかにすることを目的としたものである。

3. 研究の方法

江戸庶民の旅の実際を伝える史料は、江戸が火災都市であったことや、近代以降の震災、戦火の影響で当該地域に残されたであろう史料の多くが焼失ないし散逸してしまっている。そこで、史料の蒐集範囲を関東地方一円にまで広げてみることにした。当該範囲に暮らす庶民の旅も研究対象として取り込み、それを江戸庶民の旅との比較対象として設定すれば、江戸庶民の旅の特徴がおのずと浮き彫りになると考えたからである。これによって、江戸関連の研究に付きまとう史料上の限界をある程度克服することができる。

庶民の旅費の実際を証かすための手掛りとして、本研究では主に「旅日記」を用いた。近世に起こった現象を再構築するうえで、旅人自身が道中の行動を書き留めた旅日記は恰好の史料となりうる。

史料の蒐集作業の結果、関東地方に残された庶民の旅日記として100編あまりを入手することができた。これらの史料に基づく研究成果は、下記の通りである。

4. 研究成果

(1) 江戸庶民の日常の収入と旅の必要経費

庶民の旅日記をもとに道中の必要経費を検討した結果、庶民が旅に出るには1日に1人400文程度が必要とされたことが明らかとなった。一方、江戸における中下層の商人(棒手振)や職人(大工)の日収は概ね400文程度

であり、ここから生活のための諸経費を差し引いた金額が彼らの余剰金であった。

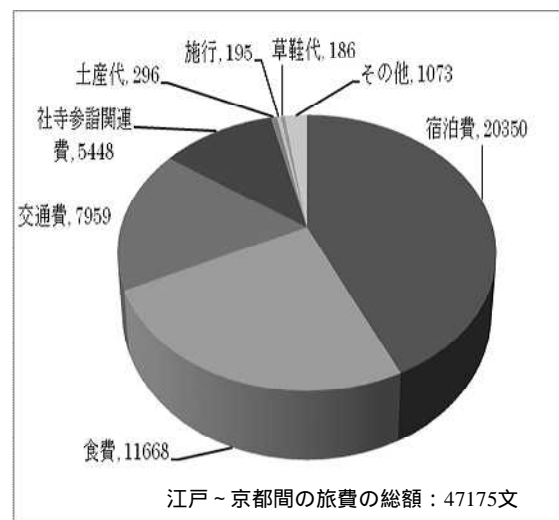
江戸からの伊勢参宮は通常2ヵ月程度を要したが、道中で1日に400文程度消費すると見積もると、総額で4両(24000文)もの旅費が必要とされた計算になる。こうして、短くて数週間、時には数ヵ月間にもおよんだ遠隔地への旅費を、中下層の江戸庶民が個人負担で捻出することは事実上不可能に近かったことが確かめられた。

(2) 江戸庶民の旅費の消費内訳

江戸庶民の旅費の傾向を知るべく、旅日記を用いて検討をおこなった。主に取り上げたのは、江戸は神田で金物問屋を営む紀伊国屋長三郎が嘉永4(1851)年に2人の供を連れて旅をした際の記録(『道中記』)である。

彼ら一行が江戸~京都間の道中(往路)で費やした旅費の内訳は、下記の円グラフに示されている。旅費の消費配分をみると、多い方から順に宿泊費(約43%)、食費(約25%)、交通費(約17%)、社寺参詣関連費(約12%)、土産代(約1%)、施行(約1%以下)、草鞋代(約1%以下)、その他(約2%)、となっている。

旅費の全体に占める宿泊費の割合(約43%)からして、江戸庶民は旅費の多くを宿泊費に充てていたことがわかる。また、今日の旅行とは異なり、交通費の割合が多くを占めていないことは、近世後期の旅の主たる移動手段が「徒歩」であったことを反映しているものと考えられる。



江戸庶民の旅費の消費内訳(単位:文)
(紀伊国屋長三郎「道中記」『ある商家の軌跡』千代田区教育委員会、2006、pp.150-156より作成)

江戸庶民の旅費の傾向が、近世後期の関東地方の中でどのように位置づけられるのかを検討した。すると、関東地方の庶民の中で特に経済的ゆとりを有していた江戸庶民は、道中においても比較的多額の金銭を消費する傾向にあったことが確かめられた。

この現象は、商工業に従事して日常的に現金収入を得られた江戸庶民が、その他の関東地方の庶民(大半が農民)よりも多額の旅費を調達し得たために可能になったと推察される。したがって、近世後期における江戸庶民の旅は、費用の面からみて豊かな娯楽であったといえよう。

(3) 江戸庶民の旅費の調達方法

先にみたように、江戸庶民の多くは、その日常の収入から推して旅費の全額を個人で負担することが不可能であった。そのため、彼らは講員から講金を募り、それを旅費として用立てる「代参講」に加入して、旅にかかる費用を捻出していた。

講組織によって旅費の多くが賄われたが、旅立ちに際しては有縁の人々から「餞別」を貰い受けるという慣習もあった。こうした講組織や餞別の存在は、江戸庶民の旅にかかる負担を経済的な側面から軽減したという意味で、庶民を担い手とする旅の発展にとり看過できない要因であったといえよう。

(4) 庶民の旅費と歩行との関係

近世後期における旅の費用を「歩行」の問題と関連付けて検討した。すると、旅の履物たる草鞋は街道筋で比較的安価で販売されていたが、値段によって質が異なっていたことがわかった。

また、商家の女性と農家の女性の道中における歩行距離の違いを、各々の経済事情と絡めて考察した。その結果、農家の女性は途中で路銀が尽きてしまわないようになるべく先を急いだため、1日あたりの歩行距離が商家の女性よりも長くなる傾向にあったことが示唆された。

ここに、庶民の経済的な事情が道中

の歩行にも影響を及ぼしていたことが確かめられよう。

(5) 江戸庶民の旅にみる近代性

近世後期における江戸庶民の旅費の問題を「近代性」を尺度として検討したところ、旅という行動において不可欠な現金を介して食事を得る行為が、貨幣経済を広範に流通させる契機となっていたことが明確となった。その意味において、旅という娯楽によって来るべき資本主義社会の体制を受け容れる環境が図らずも整えられていったと指摘される。

江戸庶民の旅は「近代」の到来を促進させる意味合いを持っていたといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

谷釜尋徳：「近世後期における関東地方の庶民による伊勢参宮の旅の歩行距離 旅日記(1768~1881年)の分析を通して」『東洋大学スポーツ健康科学紀要』8号、2011.3、pp.33-54(査読なし)

谷釜尋徳：「近世後期の庶民の旅にみる近代性」『東洋法学』54巻2号、2010.12、pp.1-14(査読なし)

谷釜尋徳：「近世後期における庶民女性による旅の歩行距離について 紀行文及び旅日記を手掛かりとして」『体育史研究』27号、2010.3、pp.33-45(査読あり)

谷釜尋徳：「近世後期における江戸庶民の旅の費用 江戸近郊地の庶民による旅との比較を通して」『東洋法学』53巻3号、2010.3、pp.33-50(査読なし)

谷釜尋徳：「近世後期の庶民の旅と草鞋」『東洋法学』53巻2号、2009.12、pp.1-18(査読なし)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

谷釜 尋徳

(TANIGAMA HIRONORI)

東洋大学・法学部・准教授

研究者番号：4 0 5 2 7 9 3 3

(2)研究分担者 (0)

(3)連携研究者 (0)